

## 2002年ワールドカップ ボランティア・シンポジウム参加報告

01年3月20日

記録： キックラブ 泉田 和雄

かなり前から話題となっていたさいたまの「Wカップ・ボランティア・シンポジウム」に参加してきました。テーマは「2002年・・・私にできること」、主催は実質、埼玉県のJAWOCと推進委員会。会場となったラフレさいたまは、5月1日に誕生する「さいたま市」の中核となる、さいたま新都心にあり、出来立ての近代的で、その分無機質なビル群の中にありました。

開場は13時でしたが、受付をすませて部屋に入ると、スクリーンでは、フランスWカップのボランティアビデオが流れていて、メインの会場前では、参加団体やWカップスポンサーのカウンターが設置され、なかなか賑わっていました。



Wカップ宣伝用のぼり



手前はスポンサー関連

【グッズ・マスターカード・朝日新聞】



奥は市民活動団体

【BIND-AID、JSA、JOYグルメ、  
U-GET2002】

誰がコーディネートしたのか、スタッフとしても多くの市民ボランティアが活動していました。また、市民活動団体同士の連携もあるとのこと。反面、参加している市民は多種多様であり、本来的な市民レベルの活動は、まさにこのイベントを契機として始まるのだろう、と感じられました。仙台で活動を開始したキックラブとは、今後、いろいろ刺激しあい、いい関係が生まれれば、と思いました。

基調講演はイタリアでは、生まれながらのナポリファンというサッカーが生活の一部、という日本ではサッカージャーナリストとしても、活動しているパンツエッタ・ジローラモ氏、軽妙な日本語で、イタリアにとってのサッカーについて1時間ほど、話がありました。まとめでは今回のWカップの意義と、それをしっかり楽しむ気持ち、を強調していました。なかなか楽しい人でした。この基調講演は、メイン会場の他、2つの会場に中継され、また各会場では、手話の説明もありました。実際、今回のイベントには

埼玉だけでなく、山口や静岡など全国から2,000名をこえる応募があったようです。



### 第2分科会の会場風景

この後ろではこの段階では100名程度の方が基調講演を聴いていました。

各イスの上には、朝日新聞からのスポンサーグッズと、当日の資料の袋が既に上がっていました。メインの会場はこの下の階、この部屋の隣には、第3分科会の会場があり、そこにも中継されていました。

基調講演が終了すると、JAWOCと推進委員会の担当が登場し、ボランティア登録についての説明。全国1の合計1,900名の募集、ということで、30分ほど、質問も受けていました。

質問の内容としては、高校生の登録は可能か？（答えは個人では無理であるが、学校単位での登録では検討したい）語学ができないと登録できないのか？（答えは3～4割、語学を必要としない業務があるため、応募は可能だが、ウェイトとしては、初級以上の語学を必要とする業務が多いため、出来ることならこれからの1年ちょっとで勉強もしてみしてほしい）、さいたま県民でないと登録できないか？（可能な限りWカップ後を考えると、県民であることが望ましいが、期間中の指定された日に指定された場所にきていただけるのであれば、県民以外でも登録は可能、ただ、宿や交通費の負担は難しい）といったものがありました。また、正式なボランティア登録が必要とされないものとして、さいたまの文化を観光客などに説明する「文化紹介ボランティア」や、期間中町をきれいにする「環境美化ボランティア」なども必要になってくると想定されるため、自分達のできることをぜひ、一緒になって考えましょう。というアピールもありました。



分科会は1時間半ほど3つの会場に分かれて開催されました。第1分科会は「ワールドカップ大会ボランティア」について、私の参加した第2分科会は「市民参加で大会を楽しむ」というもので、埼玉韓国青年会議所のチェさん、駐日英国大使館のトムさん、日本サポーター協会の稲垣さん、U-Get2002の竹原さんとそれぞれ立場の違うパネリストが、自分とWカップの関わりについて、そして自分達がこれからやろうとしていることについて、紹介し、会場も交えて意見の交換を行ないました。

期間中の観光客に対する、適切な情報の提供に関するものや、梅雨という時期であり、迎える立場として、傘の提供などの準備に関するもの、今後Wカップの情報が知りたい時、また、関わりを持ちたい時に、総合的な市民向けの窓口や場所が必要である、といった提案もありました。

この点は当然宮城も共通するものと感じました。せっかく訪れる観光客がスタジアムの立地から考えると、通過するだけになるので対応が必要では、というものや、目の見えない方のためにHP上で音声で案内すること（各国語で）、期間中、ホームステイができる環境をもっと広げたい、という人もいて、最終的には、当日集まったバネリストから参加者まで、可能な限り多くの市民で、自主的な活動組織を作っていこう、という呼びかけもありました。



このあたりは、方向性としてまさにキッククラブそのものであろうと思います。

結局、予定の終了時間を30分あまりも超過してシンポジウムは終わりました。その後、JSAの浅野さんとつかの間、話し合いましたが、全体の状況からみれば、宮城はむしろ進んでいると感じており、こと市民レベルという視点からみれば、自信をもって意見交換や連携した活動に取り組みましょう。という提案がありました。